

氏名	李 雯 文
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第390号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	重層的社會空間としてのカトリック村 ——中国陝西省におけるカトリック村落についての文化人類学的研究——
論文調査委員	(主査) 教授 田中雅一 教授 菅原和孝 准教授 高嶋 航 教授 池上良正

### 論 文 内 容 の 要 旨

李雯文氏による博士学位申請論文は、タイトルが示唆するとおり、カトリック村、すなわち大半がカトリック信者からなる村の調査に基づいて、現代中国のカトリシズムとその信仰に生きる人びとについて考察したものである。

本論文は全部で10章からなる。内訳は序章、本論8章、そして終章である。本論8章はさらに3つに分かれる。第1部「中国社会という文脈におけるカトリック村」には3章が含まれ、第1章「調査地概要」、第2章「親族・家という絆」、第3章「婚姻」、である。第2部は「信仰空間における主体の生成」には第4章「日常的宗教儀礼」と第5章「Born Catholic? ——カトリックになること」が収められている。第3部「政治空間における葛藤——教会・国家・権力関係」は第6章「信仰をめぐる過去の再構築」、第7章「教会におけるポリティクス」、第8章「カトリック村におけるポリティクス」からなる。

西洋の宣教師を通じて中国社会に導入されたカトリシズムは、本論文の舞台となる陝西省の農村に到来してから200年の間に歴史的・地域的変貌を被り、村人の信仰活動に深い影響を及ぼしてきた。とくに1950年代以降、国家による宗教弾圧を契機に生じた教会内部の分裂および闘争、さらにそこから生じる親族や隣人との信仰上の対立や共存が村人にとって重要な課題となっている。さらに、1980年代になって台頭した消費主義や個人主義が信仰の多様性を生み出し、カトリック信徒たちはこれまでにない状況に直面している。

本論文は、こうした大局的な状況に配慮しながら、カトリック村の人びとに焦点を絞ってつぎのように問いかけている。カトリシズムを取り巻く変化や政治的な問題が、個々のカトリック信徒にとってどのような意味を持っているのだろうか。過去の弾圧はどんな体験として理解されているのだろうか。かれらは今どんな変化や問題に直面しているのか。

本論文の目的は、以下の3つの関係から中国カトリック村民たちの宗教実践の動態を明らかにしようとするものである。すなわち、1) 中国陝西省農村に住むカトリック信徒の経済活動と社会関係、2) 日常生活と儀礼および非カトリック住民との関係、3) 教会と国家の政治権力関係である。

この目的におおよそ対応する形で本論文は3部に分かれる。第1部は、カトリシズムの日常的実践を、中国社会という文脈に位置づけようとする試みである。地縁や血縁に焦点をあて、家族・親族・婚姻など、中国社会の特徴として論じられてきたことがらどの程度カトリック村にもあてはまるかを検討している。さらに、年中儀礼と人生儀礼を通じて、中国社会という文脈の中でカトリックがいかにか日常的な儀礼祭祀の中に組みこまれ、また、周囲の非カトリック住民といかなる関係を築いてきたかを考察している。

第2部は、村人にとってカトリックであること、あるいはカトリックになること、とはどのような意味を持つのかを探求している。第4章では、年中儀礼と人生儀礼が順番に記述、分析される。とくに特徴的な儀礼として葬送儀礼、その背後にある死についてのカトリック独特の観念が紹介されている。第5章では、いかにして、カトリックとして生まれた村人たち

が信仰に目覚め、より自覚的に「カトリック」になるのかが問われる。

第3部では、カトリック村の実態に迫るにあたって無視できない政治権力および国家との関係をテーマとする。第6章は、この地域の歴史を、村人の視点から紹介している。本章の関心は、「事実」を調べて歴史を再構築することにあるのではなく、過去の出来事がいかに記憶され、また語られるのかを考察することによって、カトリック村の信者たちにとってそれがどのような意味をもつのかを明らかにするところにある。第7章では、教会そのものの政治的局面に注目し、「地上教会」と「地下教会」という、われわれにもなじみ深い対立概念が取り上げられる。そして両者の対立の曖昧さと流動性を指摘している。第8章では、申請者と村の権力者との対面、村の幹部と村人の関係が反映される一連の具体的な事件、および共産党と教会の関係についての語りから、カトリック村における権力構造を検討する。

最終章では、以上の各章で明らかになった論点をもとに、カトリック村落が、さまざまな利害関係からなる個人や集団の競争と葛藤、あるいは統合と分化によるダイナミックな空間を構成していると論じ、先行研究における均質な集団としてのカトリック信徒たちという前提を「重層的な社会空間」という視点から批判し、より現実に沿った信徒像に迫っている。

### 論文審査の結果の要旨

李雯文氏の博士学位申請論文は、中国陝西省におけるカトリック村の文化人類学的な調査に基づき、現代の中国社会におけるカトリック信徒たちの宗教実践、日常生活、そしてかれらをとりまく政治、経済、宗教的な状況について論じたものである。評価すべき点は以下の4点にまとめることができる。

- 1) 対象の独創性：本論文は、二つの点で独創的な民族誌となっている。まず、カトリック信徒を取り上げているという点である。漢人か南部の少数民族（非漢人）に二極化する傾向にあった、日本における中国の文化人類学的研究にあって、中国漢人社会における宗教的マイノリティ、カトリック信徒に焦点を当てた数少ない民族誌であることに注目したい。これは、中国に関する文化人類学的研究の新しい方向を示すものとして評価できる。もうひとつは、本論文が現代中国の農村部についての一級の民族誌であるという点である。その際、とくに注目したいのは、本論文には90年代に入って加速した中国経済の成長とそれに伴う消費主義が農村部にもたらしている影響、および共産党幹部など、村の有力者たちの反応が詳細に記載されていることである。こうした事実はなかなか外部のものには分からないし、伝わることはない。宗教的マイノリティと現代中国の農村社会という二つのテーマを取り上げた点において本論文の価値はきわめて高い。
- 2) 現代中国の理解への貢献：いうまでもないことだが、今日、中国はインドとならんで国際的にもっとも注目される国家となっている。しかしなお、レイト・カマーである中国に対する偏見に満ちた報道が日本では後を絶たないし、ネガティブな側面が不当に強調される傾向にある。本調査は、マスメディアがほとんど取り上げることのない農村部でおこなわれている。そこで申請者が出会ったさまざまな人たちや出来事は、たしかにカトリック特有のもので、一般化できないものかもしれない。しかし、上海や北京だけが中国ではないという意味で、本論文に描かれている中国農民の世界は、われわれの現代中国理解に貢献するものである。
- 3) 視点の独創性：中国におけるキリスト教の歴史、共産党政府による宗教弾圧、その後の宗教復興などについての研究はこれまでもなされてきたが、それらはあくまでマクロな、外からの視点にとどまっていた。それに対して、申請者は、個人からの視点を強調している。過去60年の間に中国農村部で生じたさまざまな歴史的な出来事は、農民にとってどのような意味を持ち、また持ち続けているのだろうか、といった問いに答えるためには、個々人の考えや体験に焦点をあわせなければならないからである。そうすることによって、カトリック信徒を均質な存在としてとらえるのではなく、かれらをよりダイナミックな人間関係のネットワークに位置づけることに成功している。
- 4) 方法の独創性：本論文の特徴といえるのは、かなり多数の語りが収められていることである。その大半は村人たちへの広範囲にわたる質問への答えであるが、この語りによって、村人たちの多様な相貌に迫ることができた。こうした語りから、村人がどのような視点で政府を批判し、またその権力に抵抗しているのかがわかる。その際、申請者が依拠しているのは、西井涼子によって提唱された「社会空間」という概念である。この立場は、調査地を閉じられた空間とみなすのではなく、人びとが生活する場を異質なものが共存する空間としてとらえようとするものであり、グローバル化が

進行する現代中国においてとくに有効である。それによって「異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程」が認められる場として、カトリック村を理解することが可能となる。人間関係に見るダイナミズムへの配慮こそ、現代中国の研究において不可欠なものであり、そこに中国社会にとどまらない、より普遍的な貢献を認めたいと考える。

以上のように本論文は理論的にも独創性に満ちた一級の民族誌であるという点で審査員の意見が一致した。本研究科、共生文明学専攻、文化・地域環境論講座は、文明相互の共生を可能にする方策を探求するために創設されたが、その設置目的にふさわしい内容をそなえたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年9月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。